推薦者：片岡欣夫

小川秀人
（株）日立製作所

お友だちの作り方

東芝の片岡さんから，常にソフトウェア工学の第一線という過分な紹介とともにバトンを受け取った．むしろ第三線くらいから飛び道具研究を投げ込んでいる私がコラムを書くなぞ身の程知らず．しかし，顔の広い氏の印象に残る一人に選ばれた栄誉を受け，筆を取る次第である．

片岡さんとご一緒した会誌専門委員会では大人しくしていたつもりで，氏の印象に残った理由も分からないため，私にとって最も印象的だった出来事を書く．おそらく委員に加わった年のこと．ある大学教授に執筆いただいた記事の担当を引き継いだ．が，これが読みづらい．私と片岡さんとの初めての共同作業は，この原稿の校正だった．この段落を先に，この表現はこう変えよう……と話し，文章を大きく改変した．高校までの最得意科目が国語だった隠れ文系の私は，より読みやすい記事を届ける使命に燃え，原稿に手を入れた．このとき，片岡さんの言語感覚は自分の感覚に似てる，この人となら一緒にやっていけると思ったものだ．また，著者の先生には修正を快く受け入れていただいた．もし，片岡さんに出会っていなかったり，改変は失礼だなどと叱責されたりしたら，私は，社内に閉じこもり，このエッセイを書くこともなかっただろう．お二人に感謝である．とはいえ，自他ともに認めるコミュ障の私は，編集委員会などの与えらえた機会がなければ，プライベートで親交を深めることもなく，本業をともにしたわけでもない．私と片岡さんを繋いでいたものは，Facebook だ．どちらがコンタクトしたか記憶はないが，私の友だち一覧には片岡さんのゴルフ姿があり，私の趣味の投稿を片岡さんが見ていたはず．コミュ障の友だち関係は，SNS によって繋ぎとめられた．

昨年（2017 年）度から電子情報技術産業協会（JEITA）のソフトウェアエンジニアリング専門委員会に出席している．そのきっかけも Facebook．弊社大先輩である大島啓二さんから Facebook で受けたある依頼をきっかけに，委員に仲間入りさせていただいた．大島さんが SNS で語るソフトウェアシステムの開発経験談を読み，会社の上下関係とは違う敬意が増し，人脈も増やしていただいた．これも感謝である．

次に，SNS が人間関係を繋ぎとめた同世代の研究者として，電気通信大学の西康晴さんを挙げたい（日頃「にしさん」と呼ばせていただいているので以降は親愛の意味を込めてそのように呼称させていただく）．にしさんとの最初の邂逅は，2006 年の ICSE というソフトウェア工学分野最大の国際会議会場と記憶している．その後，弊社でにしさんにご講演いただいたり，にしさんが理事長の NPO 法人主催のシンポジウムで賞状をいただいたりしたが，活動をともにすることはなかった．にしさんのつぶやきからその知見に感銘を受け，たまの脱線に呆れたりしていた（失礼）．昨年，にしさんから Facebook で連絡があり，ある社会課題について議論し発起したのが，AI プロダクト品質保証コンソーシアム（QA4AI, http://qa4ai.jp）だ．発起に際し，関心を持っていただけそうな方にご相談したり，未対面の方と共著論文を執筆したり，と SNS が重要な役割を果たした．いま QA4AI の運営では Slack や Google Document を用いており，もはや電子メールは前世紀の遺物のよう．

ところで，産業界には，学生時代と研究テーマが一致しない研究者も多い．私の学生時代の研究テーマも，ソフトウェア工学でなく，前ブームの人工知能だった．異分野からきた新米研究者には，縦（教員と学生）と横（教員間）の関係からなる研究者ネットワークには，入り込みづらいこともある．しかし，ソフトウェア工学を専門とする会社の後輩を Twitter でフォローし，その知り合いをフォローしているうちに，多くの若い研究者といわゆるフォロー／フォロワー関係となった．研究会で「はじめまして．お世話になっています」という謎の挨拶をし，夜にはラーメンをご一緒できるようになった．年増の社会人研究者には，若い研究者との交流は大きな刺激になる．逆も同じだと思いたい．産官学連携が叫ばれるいま，学会は，時間と空間と人間関係をも超えられる SNS を駆使し，より一層のコミュニティの拡大と分野の発展を図ってほしいものである（SNS に社内からアクセスできない旧式企業のことは気にせずに……）．

さて，SNS と利害関係のない私が，なぜ SNS 話を引っ張ったのか．実は，本リレーコラムでは「自分から遠い人」にバトンを渡すよう依頼があった．遠いとはいえ，知らない人にバトンを渡せない．知らないけど知っている人？！　すぐに思い浮かんだのは，一人の教授だった．教授の研究室の学生さんや共同研究者の皆さんとは国際会議等で何度もご一緒し，教授が作った bot に SNS 上で煽られ，子どもが採ってきた謎の幼虫の写真を送ってモンキチョウだと教えていただく仲なのに，いまだお会いしていない．これをネタにした上で，バトンを渡そう．バトンの渡し先がエッセイの内容を決めた．

というわけで，まだ見ぬ憧れの水野修さんにバトンを渡す．しかし，詳しい人となりのご紹介もできないので，多趣味なご様子をご本人に語っていただこう．いつか，「あくあたん」見に行きます（笑）．

なお，バトンの受け渡しも当然 SNS で行った．